

ドイツ・文学の描くその紋様

齋田光行先生退職記念論集

編集・発行

齋田光行先生退職記念論集編集委員会

代表・岡田恒雄

発行日 2002年7月21日

印刷所

〒169-8050 新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学生生活協同組合

脳の盲点と作家の罪
クリスタ・ヴォルフ『原発事故』における
テクノロジー批判と文学的な自己批判

杵淵 博樹

0. 序

クリスタ・ヴォルフ(1929~)の『原発事故』¹は、1986年4月に起こった旧ソ連チェルノブイリ原発事故を主要テーマとしている²。原子力利用は、軍事目的であるか非軍事目的であるかを問わず、人類を壊滅させるポテンシャルを持っているが、1980年代後半、少なくともこの作品の語り手にとって、このことはすでに明白になっている。この事故の深刻さは、そのような一般的懸念に、新たな生々しい現実性を与えた³。

この作品は、原子力利用に代表される一部の先端テクノロジーがはらむ危険性に焦点を当てており、このようなテクノロジーに対する作者の批判的姿勢を反映している。ただし、この「批判」は、単に原子力技術を否定するような単純明快なものではない。ここには原子力発電に反対する明確な一義的テーゼなどはひとつも提示されていないのだ。

この作品におけるテクノロジー批判は、淡々と進行する日常生活の様子を背景に、人類の進化や、文明の進歩、政治や芸術など広く人間の文化的営みを含みこむ総合的な文脈のなかに現れ、モチーフの連想関係を主なダイナミズムとしながら展開し、

¹ Wolf, Christa: Störfall. Nachrichten eines Tages. Berlin 1987. (邦訳『チェルノブイリ原発事故』保坂一夫訳、クリスタ・ヴォルフ選集2. 恒文社、1997年)本論では、以下の版を使用する。Sammlung Luchterhand im dtv, ungekürzte Ausgabe, München Februar 1994. 本文中の括弧内の数字はテキストの参照ページを示す。

² B. Haines は、それまで19世紀や古典古代など過去を舞台にした作品の続いていたヴォルフが、時代設定を現代とする作品を発表したこと、そしてその後、同様に現代を描く作品が続くことに注目している。このことも、チェルノブイリ原発事故が作家ヴォルフに与えた影響の大きさを物語っている。Vgl. Haines, Brigid: The reader, the writer, her narrator and their text(s): intertextuality in Christa Wolf's *Störfall*, in: Christa Wolf in perspective, hrsg. von Ian Wallace, Amsterdam 1994. S.157-172.

³ 1980年代、原子力利用の危険性を主要テーマとする作品を試みたのはヴォルフだけではない。『原発事故』発表の前年には、ギュンター・グラスが、核兵器による人類の滅亡を描く作品を発表している。Grass, Günter: Die Rättin. 1986. グラスは、1980年の『頭脳出産』でも、原子力発電批判を主要モチーフとして取り上げている。Grass, Günter: Kopfgeburten oder Die Deutschen sterben aus. 1980.

狭義でのテクノロジー論の枠を逸脱しながら拡散してゆく⁴。そして、作者を思わせる語り手は、なぜ、文学作品の枠組のなかでテクノロジー批判を示そうとするのか、という、作品の性質が体现する問題、すなわち、先端テクノロジーの動向が社会の基本要件を決定付けるような時代にあつて、作家の仕事とはなにか、文学とはなにか、という自己言及的な問に直面する。

本論考では、この作品の基本的な物語構造を確認し、その枠組のなかで行われる言語作業の特徴を、その作業が担うテーマであるテクノロジー批判との関連において分析する。最後に、それを踏まえた上で、この作品の持つ「文学論」的内容に考察を加える。

1. 語り手の場所の孤独

テキストは、基本的に、原発事故が最初に伝えられた一日を追う。

語り手は作者ヴォルフを色濃く反映している。まず、女性であり、作家であること、そして同名の友人とされる人物の名がまさにヴォルフであることから、この点は意図的に強調されていると言える。

語り手において、この日はなによりもまず、チェルノブイリ原発の事故の知らせを聞いた日として位置付けられるが、同時に、弟が脳外科手術を受ける日でもある。この原発事故と脳外科手術は、ふたつのもっとも主要なモチーフとなる。これらのモチーフを軸に、語り手のテクノロジー批判、文明批判は、連想関係によって領域を広げながら展開される。

この抽象的作業と並行して、語り手は表面上普通の毎日とそれほど異なるところのないらしい日常生活を行っている。隣人と言葉を交わし、突然の訪問者に驚かされ、友人や肉親と電話で話し、手紙を読み、手紙を書く。これらのコミュニケーションは、直接間接に上述の主要モチーフに関係付けられる。また、台所仕事や食事、植物の世話や、自転車での外出など、語り手の単独での行為も、報告の過程で彼女

⁴ この作品では、文学作品やメルヒェン、聖書など、多岐にわたる引用が大きな役割を果たす。それらは語り手に聞こえてくる声として、その思考に流入し、テキストの展開を導く。特に引用される文学作品の扱われ方からは、「文学」テキスト一般、そして作家としての自分自身を批判的に精査する姿勢が伺える。Vgl. B. Haines, S.164-165, usw.

の批判的言語作業に組み込まれ、「日常生活」における「現実」の重要な構成要素として、この作業の展開の方向を規定している。

これらすべては、遠く離れた場所で脳の手術を受けている弟、すなわち、その場に存在しない相手に話しかける形式で語られる。

語り手は、その場に存在しない相手と向き合っている。そして、遠く離れた場所にあるはずの「現実」を経験しようとしている。彼女は、生き残りをかけた弟の脳手術の経過を気遣うが、その際、その様子を想像し、語りかけ続けることによって、手術が成功するためのなんらかの影響力を行使できると考えている (24, 128)。

語り手は、娘や孫娘と電話で語り合い、手紙を通じて旧友を想う。これらの交流は親密であり、現在の対話の出発点、あるいは議論の前提となる多くの共通認識の存在がうかがえる。これは、彼らと語り手それぞれの「現実」の相互の共有部分が、それまでのコミュニケーションの積み重ねの過程で拡大しているということだ。ただし、語り手は彼らから空間的には隔絶している。

それに比べて、近隣の人々や、見知らぬ突然の訪問者たちとのコミュニケーションには違和感と距離感がある。『原発事故』のニュースに対する反応においても、語り手の抱く懸念の深刻さが共有されることはない⁵。つまり、彼らは、語り手と同じ地域に暮らしており、目の前に現れているにも関わらず、語り手とは大きく異なる「現実」を生きているのだ⁶。

原発事故と脳外科手術を軸に、現代のテクノロジー、人類文明の進歩などに関して自問を重ね、それらの原因や責任、歴史的意味や文化人類学的起源など多様な文脈を飲み込みながら、最終的に、作家として書くことの意味、すなわち自分自身の内部へと方向を定めてゆくこの作品の展開は、「近さ」を持つ者たちとの空間的隔たりがもたらす相対的孤独を背景にした内的対話という条件に対応している。ここでは、彼女にとって主観的により大切な人間関係はすべて、電話や手紙や想像を経

⁵ たとえばある男は、語り手に原発事故について水を向けられると、「知らぬが仏だから、ラジオのニュースもよく聞いていない」と答える (28)。

⁶ 隣人たちとの対話において、語り手の側の発言はほとんど紹介されない。また、隣人たちの発言が引用されても、情報としての発言内容がほかの連想の契機となることはあっても、それに対する直接のコメントは僅かである。これはテキスト全体を含む弟への話しかけはもとより、活発に意見が交換される、娘や友人との電話での会話とは対照的である。

由して初めて成立するものばかりである。語り手の日常的身体的生活圏に現れる、空間的には近いものの、本質的に「遠い」ひとびとは、語りの成立する場所、語り手の置かれた心理的な場所の、ある種の孤立を際立たせている。

また、彼女は五日前から「どのくらいのあいだ、自分に話しかけずに一人でいられるかというテスト」を始めており、すでに三日目からは、声を出して自分と対話し始めていたという(14)。この孤立は、彼女自身が意図的に作り出したものでもあるのだ。

語り手は、広大な宇宙空間にポツンと浮かぶ地球と人類の孤独を想う(130)。人類には語りかけるべき他者が存在しない。自分自身についてと同時に、人類全体について考えを巡らす語り手の場所は、二重に孤立しているのである。

2. 脳外科手術

弟の脳手術は、難病治療に道を開くという意味でのテクノロジーの進歩のさしあたり肯定的な側面を代表するが、語り手が示す不安は、手術の成否ばかりではなく、この手術によって命が救われる過程で、その命の主体が何らかの本質的な変化を被りうるという点にも向けられている(32, 130)。

脳外科手術の前提となる脳生理学において、まず脳は対象化され、分節化される。つまり、ここでは脳は客体であって、主体ではない。脳は思考・感覚・感情のプロセスの場であり、主体の成立する場でもあるが、身体の一器官でもある。脳は、外部の現実を直接感知することはできない。あらゆる外部情報は感覚器としての身体のほかの部位を経由した刺激によって脳に伝えられる。しかし、脳が外科的な操作を受け入れるということは、外部の現実による直接的アプローチが生じるということである。この関係は一方的なものだ。外部にある他者による、身体の他の部位を介さない直接的介入が可能であるなら、脳とコンピュータのアナロジーはより完全なものとなる。ここでの脳は、神経系を伝わる微細な電気的・化学的刺激にすべてを還元することのできる場所であり、外部から直接操作できる場所である。主体が「現実」としていた世界を、この剥き出しの脳に再現するのに、理論上はもはや身体のほかの部位など必要はない。つまり、主体にとっての「現実」を考える際、不

可欠のものであったはずの身体性の特権は解消してしまうのだ。

こうして自由な近代的主体はあらためて相対化される。脳外科手術は、分割できないものであったはずの個人を、その自己同一性の自覚の核である脳において解体する。人為的核分裂を基本とする原子力技術は、語り手のメタファーによってここに重ね合わされる（46）。

語り手は、ひとりの人間の全体としての存在が、物体としての脳における操作によって変質しうるという事実と、慣れ親しんだ身の回りのもの、風景、自然環境の全体が、遠く離れた原発での事故によって、やはり致命的な変化を被りうるという事実を体験している。どちらの場合も、その変化は一見してわかるようなものではないが、その変化が人類にとって未知の性質を持つものであること、そしてそれが少なくとも長期的には人類にきわめて深刻な影響をもたらすものであることは予測できる。

『原発事故』におけるメタファーとしての原子力利用と脳外科手術の接点は、種としての人類の自己破壊的傾向に置かれている。新しい技術の発明と、劣った集団の抹殺は、脳の進化の過程において切り離せないものだったという仮説に、語り手は反論できない（92）。だとすれば、人類を危機に陥れるテクノロジーの暴走は、脳の暴走である。その脳は、ほかの身体部位を切り離して、つまり、みずからの身体部位としての物理的存在様式を置き去りにして、あたかもすでに身体性の限界から解放されたかのように、少なくともそれを密かに熱望しながら、純粋な主観的存在として世界と向き合おうとする。そして、この脳の基本姿勢は、客体としての脳自体に対するときにも変わらないのだ。脳が、最後の身体としての脳自体を、完全にテクノロジーに置きかえるとき、おそらく主体の身体からの解放は完成し、その意味での人類は滅び去るのだろう。

3. 日常的身体と非日常的テクノロジー

語り手は、動きたいという衝動に駆られて自転車に乗る（103）。慣れない自転車をこいで、動悸は激しくなるが、彼女はそれに満足感を味わう。こうして、再確認された身体性は、肯定的ニュアンスを与えられる。行き先は、古代遺跡のストー

ンサークルである。そこで彼女は古代人たちの踊り、すなわち直接的身体表現を想像する(104-106)。ここでも、彼女の思索のテーマは脳の問題であるが、その展開を刺激しているのは、想像上の古代人たちの身体と彼女自身の身体である。ここで彼女がイメージしている脳は、常に、その個体の脳以外の身体部位を伴う存在である。脳が作り出した文明、テクノロジーが、人類の総体としての進歩の一般的イメージの中心となりながら、少なくとも近現代において、人間の生活環境に、明白かつ大規模かつ急激な変化をもたらしたものであるとすれば、身体の変化はそれに見合った明白さ、大規模さ、急激さを伴っていないように見える。

原子力利用や脳外科手術などの先端テクノロジーの世界とは一見別次元にあって、語り手が暗黙の前提とする日常生活もまた、その先端テクノロジーの世界との接続が保たれることによって、さまざまなレベルでの影響を被っている。それに対応して、肉体的存在としての人間もまた恒常的に変化していることは事実だろう。しかし、この語り手は、人類の進化を象徴するテクノロジーの進歩が、日常的身体の変化に「先行」しており、一握りの個体の脳(97)が作り出す新しい「現実」と、日常的身体の「現実」とのあいだにズレがあることの確認を優先している。彼女は、息が切れるほどの勢いで自転車をこぎ、森で春の匂いを嗅ぎ、メルヒェンの一節を想起するが、ここに浮かび上がってくるのは、日常的身体としての彼女の「現実」における、先端テクノロジーとの関係が明らかに希薄な一面の存在である。

電話やラジオやテレビなどのコミュニケーション・テクノロジーは、ここでもすでに日常であり、彼女の感覚や思考の過程に作用しながらも、自覚されるような不安や恐怖、驚きや違和感をもはや与えない。これらの機械が故障しても、それが直接的原因となって彼女が存在の危機に陥ることはなさそうだ。これに対して、原子力利用は、多くの主体にとって日常的身体レベルでの「現実」として把握することの難しい、非日常のテクノロジーである。

高度に専門化した技術の複合体としての性格を持つ社会においては、非専門家は、いつも先端テクノロジーにただ依存することしかできない。それは、原子力のような技術の場合、専門家に無条件で身をまかせ、命を預けることを意味する。その状況を直視し、不安と恐怖を受け入れるとき、非専門家は、限られた情報に頼りなが

らそれらのテクノロジーの「現実」を想像するが、その想像には、仮想の身体感覚と感情が伴う。一方、語り手によれば、およそテクノロジーの進歩は、「愛という強い感情」を得られない者たちの渴望を原動力とする代償行為である(50-51)。だとすれば、そのような専門家の想像力にこの「感情」が欠けているのは当然のことだろう。

『原発事故』における語り手の「現実」における身体感覚と感情の重要性は、先端テクノロジーに対する彼女の非専門家としての自覚に対応していると言える。非専門家にとって、チェルノブイリ原発事故のような大惨事の「現実」を想像するということは、数え切れない人々の死と、死にいたる苦しみを、仮想の身体感覚と感情をもって生々しく追体験しようとするということだ。そしてその恐怖を味わい、それを悲しみ、それをなんとしても避けたいという意思に伴う不安に曝されるということだ。それが可能かどうか、それが正当なものかどうか、を確認することは原理的に不可能である。それでもそれを試みることこそが、「専門家」の排除する日常的身体における「現実」の、未知の領域への敷衍の唯一のあり方なのだ。

ただし、そのような「現実」を言葉に置きかえることはきわめて難しい。語り手もそれを不可能だと考えている(89)。だから、このテキストには事故の惨状の細部や全容に関して直接想像するような記述は存在しない。彼女は淡々と報道の内容をたどり、特集番組での「専門家」たちの発言を追う。そしてこの事態に動揺しながら、その「現実」の核心部分に迫ることができずに苦しんでいる。

4. 世代の連鎖と生き残りの現実性

以上論じてきたように、日常的身体における「現実」は、チェルノブイリ原発事故という、非日常的テクノロジーのもたらした大惨事と向き合う際の、語り手の立場の基礎となっている。

しかし、当然ながら、この日常的身体は、個体においては数十年で失われる。人類の存続が意図されるならば、人類は子孫を残し、世代が更新されなければならない。その意味で、「人類存続」を支持する者にとっての日常的身体性は、その直接的に感知できる範囲内で、子どもが生まれ、育ってゆくことを前提にしている。

また、世代の更新の継続が「現実」として感知されるということは、それぞれの個体の日常的身体が、あらかじめこの連鎖のなかに位置しているということである。つまり、この「現実」は常に、より新しい世代と関係を結ぶばかりではなく、より古い世代の人々との関係のなかにあるということだ。そこには、まだ生まれる前の子供たちや、もうすでに亡くなった人々との関係までが含まれる。

『原発事故』では、語り手の家を、ある家族が突然訪れ、その一家の夫であり父親であるらしき男が、戦後期に幼くして病死した妹の話をする(112-116)。その遺体を、この家の敷地のどこかに埋めたはずだと言うのである。語り手と弟もまた、戦後の混乱期にチフスにかかって生死のあいだをさ迷ったが、生き延びた。隣人のなかにも、戦争と戦後を生き抜いた老人たちがいる。これらのエピソード群によって強調されているのは、語り手もまた、今単に生きているのではなく、死んでゆく者たちのあいだで生き残ってきたのだということである。

死んだ少女の話聞かされたことに苛立ち、自分たち姉弟が結果的に生き残ったことに後ろめたさを感じながら、語り手はその幸運を既得権として正当化したいと考える。この生き残り感覚のジレンマは、テクノロジーの進歩によってたまたま手術が可能になった弟の場合にもあてはまるだろう。生き残ることの幸福は、生き残らないことの不幸との対比のなかで意識される。脳外科手術のテクノロジーの孕む、未来において人間の「現実」を変容させる危険性を念頭に置くなら、この手術を受けることを選択は、そのようなテクノロジーと共犯関係を結ぶことをも意味する。この選択の未来における意味はまだわからない。にもかかわらず、とにかく生き残ることを優先することこそが、ここでは生の肯定を意味している。生きるためには、迷いのない、強い生き残りの意思を持たねばならないのだ。共に生きぬいてきた自覚を持つこの姉は、手術中麻酔によって意識を失っているであろう弟自身のかわりに、彼を思い続け、語りかけ続けることで、その生きるための意思を保とうとする。

語り手は、娘や孫との電話で、生活感覚や親子関係の世代による隔たりや、世代を越える共通性を意識しながら、互いの安否を気遣い、この日の事故から派生したテーマについて語り合うが(140-146)、これも、世代の連鎖の語り手にとってもっとも身近な例を作品に導入する機能を負っていると言える。また、語り手が夢に

見る今は亡き祖父母たちは、淡々と死を受け入れる場面を演じ（100-101）、語り手の生の日常的「現実」を死の側へと拡大している。この夢では、先に亡くなった祖母が、後から亡くなった祖父を看取っている。これは、死者が新たな死者を迎え入れる風景でもあるのだ。

麻酔をかけられた手術中の弟は擬似的な死の状態にある。だとすれば、彼に話しかけ、彼の声に耳を傾け、彼の状態に神経を集中するということは、死のリアリティへの接近でもある。ここで語り手は、生と死が同時に存在するような状態を想像し、その「現実」を体験しようとしているのだとも言える。

総体として人類が生き残るということは、このような多様な死者たちを想うという行為が可能な状態に保たれるということであり、人類が滅びるということは、死者を想う者が存在しなくなるということだ。ここで、死者たちが代表するものは、生き残りのための闘争の歴史であり、個々の主体によって生きられたものとしての人類の「過去」である。この作品における人類の生き残りの現実性は、このような、死者のたちの「過去」と子供たちの「未来」とが共存する場としての世代の連鎖の現実性を取りこむことによって成立している。

5. 脳の「盲点」

生き残りの現実感覚がこのようにして確認されることで、語り手にとってのチェルノブイリ原発の事故はますます衝撃的な警告となる。ところが、彼女はこのような事態を予期していなかったわけではない（12）。わかっているながら、その問題との取り組みに十分な力を注がなかった自分を彼女は責める。共犯関係、あるいは少なくとも共同責任関係があるのではないかと彼女は考えている（83）。また、彼女はこのような事故の発生を、ただ覚悟していただけではなく、どこかで待ち望んですらいただ（83）。

語り手は、危険な技術の追求は刺激をもとめて働き続ける人間の脳にとって避けがたいことだったのかもしれない、つまりそれは人類に不可避免的に付きまとう問題だったのかもしれないと考える（46-47）。脳の専門家たちに倣った、対象化による人格の解体を前提にしたこのイメージに続けて、彼女は、原子力発電を推進して

きた科学者たちを、意思をそなえた人格として捉えなおしつつ、彼らの本来の動機について推測する(47-49)。それは、十分なエネルギー供給によって、平和で豊かなユートピアを実現するためだったというのだ。そして1970年代初頭までは、語り手自身がそのような科学者たちの側に立っていたことがここで告白される⁷。ここで改めて確認されているのは、自然科学至上主義、テクノロジー万能主義と、彼女の従ってきた社会主義の理想とが不可分の状態にあったことである。社会主義を信じる者は、すぐそこにユートピアを建設するつもりであったし、その社会主義の正当性を保証するものが「科学」であった以上、先端科学に反対するものは、そのユートピアの実現の邪魔をする存在であり、「正義・平等・博愛」(48)の敵だったのである。その意味で、「科学者たち」は当時の語り手にとっては理解できない存在ではなかったと言える。ここでの語り手は、このテクノロジーの幻想に囚われた科学者たちと、明らかに一定の「現実」を共有している。少なくとも、過去の語り手は、ここで「怪物」と呼ばれる彼らと似たような現実感覚を持っていたことになる。このことは、語り手にとって、上述の「共犯性」を構成する具体的要件のひとつであろう⁸。

もちろん、その後も同じ「現実」にしがみつき続けた科学者たちと、現在の彼女との立場は明らかに異なる。語り手は、自分が不安を掻き立てる想像をせずにはいられないことを苦痛に感じながら、こんな事態を招いた科学者たちには、そのような想像力のスイッチを切る能力が備わっているのではないのか、いや、そもそも彼らにあってはそのような想像力の作動するはずの場所が、脳の「盲点」になっているのではないかと考える(90)。このとき、現代のファウストたる科学者たち(97-98)⁹と、語り手とのあいだには、テクノロジーの暴走の招いた悲惨についての責任に

⁷ 語り手は、このとき初めて反原発派と接したと言っているだけで、当時の自分の立場について明確な表現はないのだが、社会主義擁護の戦いを最優先にしていたというそれに続く文脈からは、少なくともテクノロジー全般についての根本的疑問はまだ生じていなかったことが読み取れる。

⁸ 後のこの作品『原発事故』をめぐる論争にも、DDRの政治体制と原子力技術と同様の問題性を孕むものとして扱う議論が見られる。旧共産圏における原子力開発は、社会主義的進歩思想の象徴でもあったのである。Vgl. Verblendung, Disput über einen Störfall, Disput in der Zeitschrift „spectrum“. 1991 Berlin.S.175, 233, 237, usw.

⁹ ヴォルフは、進歩的、科学的な人間の代表としてのファウスト像、およびゲーテの「ファウスト」をDDR体制の正当化に利用しようとするような解釈に対して一貫して批判的な立場を取っている。Vgl. Wolf, Christa: Lesen und Schreiben, Darmstadt 1980. Rechten, Renate: The Faust Theme, in: Christa Wolf in

関して、明確な一線が引かれている。

しかし、彼女はその「盲点」が自分の脳にも存在するのではないかと疑い始める(128)。彼女はまず、人間が言葉を得る代わりに失ったものの大きさを憂い(123-124,135-136,146-147)、別の言葉を使う集団の間での殺人のタブーの解除を想像し、バベルの塔と神による言葉の混乱のイメージ(126)を経て、現代のテクノロジーの暴走と、その背景にある、この問題を巡って対立するもの同士のコミュニケーションの不全、すなわち共通の言葉がありながら、それが通じないという現状が連想される(127)。そのような言葉の限界領域の光景をたどったあと、語り手は、自分の言葉にも自己欺瞞を見出す。

この自己欺瞞を巡る議論は弟に宛てた手紙の内容を契機にしている(128)。この手紙で、語り手は、自分にとっても不確かなことを、まるで確信があるかのように書いたという。すなわち、その後の弟の人生がどんなものであるかはまったく未知であるにもかかわらず、それを間違いなくよいものであるかのように扱い、「再生」などというメタファーを使って励ましているというのだ。ここでは、生きることを無条件に最優先する素朴な現実感覚の正当性が疑われているのだと言える。

このテーマは、言語表現によって事物を征服することはできず、より優れた表現を見つけることだけでは「現実」に立ち向かうことはできないという認識へと展開され、その認識によって、まだそのことに気づいていなかった過去の自分の言葉に対する嫌悪が生じていることが告白される。そして、この言語嫌悪(134)、自己嫌悪(135)のなかで、書かれる対象に対する文学テキストの破壊作用(136)が想起され、そのようなものをもたらす行為に快感があることの意味が問われるのだが、語り手はすでにこの「快楽」の場と「盲点」とを脳内のある場所に隣接するものとして想像している(134)。作家と科学者は、脳内にある「盲点」の傍らで「快楽」を味わう同類だったのだ。しかし、破壊的テクノロジーを生む「盲点」が、言葉を使う者すべての「盲点」そのものなのだとすれば、その「盲点」を言葉で批判できる「人間」などどこにもいないことになってしまう。

このように、語り手の議論は、原子力テクノロジーの直接の担い手の特殊性から、人類文明の本来の問題性を経て、言語表現への突出した執着という自分の特殊性へと焦点を移している。つまり、テクノロジーの罪は、それを特に直接的・積極的に担い、促がした者たちばかりではなく、人間一般に分配された上で、語り手個人の「現実」へともう一度吸い上げられている。書き手としての罪の意識は、書かれた者たちに否応なく作用する言葉の破壊性を自分自身にも向けることで、すなわち「自分よりも他人を大事にすること」(149)で相対化が試みられるものの、語り手はそれもまた自己欺瞞だと自覚している。

放射能の雲は、かつて詩に謳われた雲の魔法を打ち破ってしまったという(84)。続けて語り手は、「放射能の雲」の文学的可能性を考える。それまで放射能とは無縁の雲に引き付けられていた「感情」は、今やこの「放射能の雲」に向けられている。その「感情」は、いままでとは違う、いままでは存在しなかった「感情」である。ここで雲が代表する「自然」は「感情」に連動した対応物として扱われている。「自然」の破壊はそれまでの「感情」の破壊である。こうして、ここには「自然」、「感情」、「文学」が本質的な連続性を持つような構図が形成される。

この構図は、幼い頃の語り手姉弟がメルヒェンを演じて遊んだというエピソード(108-111)にも当てはまる。渇きに苦しみながらも魔法の水を飲まない姉としての語り手は、言葉を持たない獣たちの世界との同化をギリギリのところで拒みながら森をさ迷い、言葉なき「自然」と人間との境界線を、その水を飲んだせいで鹿になる弟の姿として間近に目撃し、体験している。しかし、弟に魔法の水を飲ませまいとするこの「良い姉」としての自覚は、弟を傷付ける「悪い姉」としての自分の記憶(133-134)を経て、言葉によってすべてを対象化してしまう作家の罪の意識と重なり合う。語り手は、メルヒェンのなかで獣たちに八つ裂きにされる「偽の姉」の運命に怯える。それを踏まえて願みれば、弟が鹿になることを結局防げず、繰り返し姉の嘆きを体験しようとする子供の頃の語り手の姿は両義的なものとなり、警告を発しながらも、直接「現実」を動かすことはできず、にもかかわらず、それを表現すること自体に快感を感じる作家のあり方の象徴となる。

この構図によって浮かび上がる語り手にとっての「文学」とは、「自然」と「人

間」との境界領域における、「感情」を伴った言語表現の試みであると言える。しかし、この境界領域の深部で作家が会うのは、「盲点」であり、絶対的な「闇」である。

7. 闇

作品末尾で引かれるコンラッドの作品¹⁰に、語り手はこの日の思考の終着点を見出す(158-162)。コンラッドのテキストの語り手が語りかけてくる声を聞きながら、彼女はその筆致に感嘆する。彼女にとって、「自分の属する文化の盲点」(161)に分け入ることは、作家として賞賛すべきことだ。ここで、彼女は自分の内部と外部の両方にこの「闇」を感じている。彼女が目する「ここもまたかつては闇の場所だった」(159)というコンラッドの表現は、言葉によって対象化される以前の世界を暗示している。ここでは、人間が言葉によって人間となる以前の過去という幻想が、窓の外の暗闇に広がる現在と重ね合わされる。この闇に囲まれて、語り手の孤独はここで極点に達する。コンラッドに共鳴する彼女の文学的探査は、飽くまでも孤独な作業なのだ。

悪夢のなかで語り手が泣きながら叫ぶ、「怪物」という言葉は、科学者たちと彼女自身との双方に向けられているように見える(162)。メルヒェンの「偽の姉」同様、「怪物」の運命は死だ。地球と人類を巻き添えにしながらか、「怪物」は最後の禍をもたらす。

この事故は、言葉では語ることのできない「闇」であった(88-89)。その言葉の限界を感じながらも、「闇」を巡る表現をより確かなものにする快感を味わい続ける自分を、語り手は罰せずにはおれない。今や彼女は、自分の心の底の底までを調べ上げ、わずかな悪意の痕跡をも見逃さず、それを根拠に自分の罪を告発し、当然の報いを受けようとする奇妙な「怪物」である。その当然の報いが死であったとしてもおかしくはない。

テキストの最後の言葉は、「地球に別れを告げるのはどんなにかつらいことだろ

¹⁰ Conrad, Joseph: *The Heart of Darkness*, 1899.

う」、である(163)。「私は絶対に別れを告げたくない」、ではない。多分彼女は別れを告げてしまうのだろう。

しかし、作家としての罪の深さのゆえに、人類もろとも死を覚悟するこの悲壮なヒロイズムの前では、歴史的事実としてのチェルノブイリ原発事故の被害の凄まじさすらも、カタルシスの伴う悲劇の背景としてかすんでしまう。ここでは、一作家たる語り手の誠実さを証明するための罪の贖いは、人類の自滅の回避に匹敵するほど重要な問題なのだ。おそらくは、このような現実感覚の転倒こそが、語り手自身も予感しているであろう、この作品の「罪深さ」であり、「文学」たる所以なのだろう。

このテキストは、衝撃的な原発事故の発生を契機にして始まるが、その冒頭では明確だった恐怖と不安が、繊細な自問自答のなかで増殖しながら次第に曖昧になり、末尾ではすべてが語り手の作家としての個人的実存の問題に収斂してゆく。このことは、語り手における日常的身体における「現実」と作家としての「現実」との矛盾を示している。日常的身体における「現実」に直接係わろうとする批判やメッセージはすべて、語られた途端に、作家としての「現実」によって相対化されてしまうのである。その相対化の果てに語り手が見るものは、追いつめられた日常的身体が予感する、人類滅亡の悪夢だ(163)。

世界の死に至ってようやく、いくつもの「現実」はひとつになり、日常的身体の生の喜びとともに、「作家」の苦しみも終わる。果たして人類は生き残るべきなのか。それを力強く肯定できないまま、作家は生き続け、書き続け、死んでゆく。これも彼女が「誰に対しても正当であることによって、他人から不当に傷つけられるのを避け」(47)ようとした結果なのだろうか。

たとえば、事故の犠牲者たちに対する正当な態度とはどんなものなのだろうか。おそらくは邪悪な意思などではなく、むしろ善意を抱きつつ、脳の避けがたい習性のために惨事を招いた科学者たちに対する正当な態度について、語り手が悩んだことはわかる。しかし、これらの双方に対して「正当な」態度とは、彼女が「正当」と認める態度とは、一体どんなものなのだろうか。それに対する答えは、ここにはない。

仮に彼女自身がそれをどんなに望んだとしても、彼女には、日常的身体に対するテクノロジーの脅威に対して、素朴かつ無条件の拒絶をもつてのぞむことはできない。よりよい未来のために、戦術的に時間を稼ぐことはできない。どこまでも普遍的真理と根源を求め、その作業を中断することのできない「作家」の「言葉」が、そのような決断の「正当性」を疑うからだ。

このテキストが提示しているのは、希望の場所である未来を奪われたユートピア主義者の絶望である。